



果てしない影

黒岩重吾

文春文庫



文春文庫

---

# 果てしない影

定価はカバーに  
表示してあります

1979年8月25日 第1刷

1990年2月5日 第15刷

著者 黒岩重吾

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

---

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan  
ISBN4-16-718209-2

文 春 文 庫

果てしない影

黒岩重吾

文 藝 春 秋



果てしない影

週刊言論

昭和47年1月7日号～11月24日号連載

昭和48年2月 文藝春秋刊

## タレントの家

木崎千香子は、某女性週刊誌の社外ライターだった。その週刊誌には、社外ライターだけで、五十人はいる。男性が三十人、女性は二十人である。

千香子はその週刊誌の宮部班に属していた。つまり、宮部がデスクだった。

こういう仕事に男女の区別はない。仕事によっては、朝九州に行き、その夜、東京に帰って、徹夜で原稿を書く、という場合だってあった。その代り、二、三日、エアポケットのように突然、暇が出来たりもする。

現在、千香子は、有名人夫婦の苦難時代、というシリーズものにかかっていた。

どんな夫婦にだって苦難時代はある。それを乗り越えて不動の夫婦関係をつくりあげた者もあれば、仲の良さは見せかけだけで、氷のような夫婦関係もあった。

家庭に入れば直ぐ分る。その日、千香子は世田谷に俳優の三木秀樹を訪れた。

三木は三十半ばだった。映画よりもテレビで活躍している。連続時代ドラマで人気者になった。そのドラマはもう二年になるが、視聴率が20パーセント台で、まだまだ人気があった。

敷地は二百坪位あるだろうか。

広い芝生に面したガラス戸からは、十一月半ばの午後の陽が、もの憂げにさし込んでいた。暖房はまだしていないが、室内は暖かい。

絨毯は厚く、応接セットのソファは薄い皮ばりで、テーブルは古い大理石だった。

こういうテーブルは、昔、何々家といわれる名家が使っていて、戦後売りに出されたものだ。今は凄く値が上がっている。

三木秀樹の人氣は、歌も歌えるところにあった。

千香子は時間通りに行ったが、三木がテレビ局から帰っていないらしく、この応接間で待たされた。十五分ほど待っていると、ドアがノックされた。三木が入って来たのだらうと、ドアを見たが違った。

三十半ばの精悍な顔をした男だった。濃い茶の替え上着にグレイのフラノのズボン、茶のハイネックのシャツというスポーティな服装だが、その男に良く似合っている。

額は広く、油気のない髪が無造作に垂れていた。鼻梁は高く鼻頭も小鼻もごつい。何となく男臭い感じの鼻だった。眼窩が窪んでいるので、彫りの深い感じがする。

男は千香子を見て会釈した。

何気なく千香子も会釈を返した。商売柄、色々な人間に会っている。服装や感じで大体の見当はつく。サラリーマンでは勿論ない。

三木秀樹に会いに来たのだから芸能関係の人間だろうか。

千香子は芸能界に生きている色々な人間を知っている。プロダクションのマネジャーから、俳優の付け人まで、様々な人種が芸能界にいる。一口にはいえないが、何処か共通したものがあつた。

だが今入って来た男には、それがない。自分と同じライターだろうか。もしライターだったら、一匹狼的なトップ屋だろう。

それとも、芸能人のスキャンダルに食いついては、金をせびり取っている人種だろうか。違う、と千香子は思った。

そういう人種には、卑しさや崩れたところがあるものだが、この男にはない。

男はソファに腰をおろすと足を組み、外国煙草に火をつけた。傍の週刊誌を取って、めくったが、薄笑いを浮かべると、テーブルに置いた。

男は斜め向かいに坐っているの、その動作がどうしても、千香子の眼に入る。

取材に行って、時間が余った時は、千香子は何も考えたくない。ポケットとしていたのだ。それは千香子が何時も精神的に緊張しているからだろう。

突然、男が軀をかいだ。おやっと思つて見ると、男は眠ったようだった。指の間にはさんだ煙草からは煙がゆらゆらと立ち昇っている。灰が今にも絨毯に落ちそうだった。

千香子はよほど、灰皿を煙草の下に持つて行こうかと思つたが、見知らぬ男が、他人の家の絨毯を焼くんだし、世話をやくこともない、と放つて置くことにした。

男はもう一度軀をかいだ。

その軀で眼を醒ましたらしく、腕を伸ばして、灰皿に煙草の灰を落とした。

自分が眠ったことに、気がついていないようだった。千香子は何となく微笑した。

こういう感じの男に、千香子は余り会わなかった。男は千香子を無視しているのではないが、別に気にもしていないのだ。

少なくとも、千香子と二人きりになり、彼女の前で眠つたような男は初めてだった。

千香子はN女子大を卒業している。

眼が大きく丸顔で、笑うと笑窪が出来る。肌は白い方だろう。きめが細かいのは芸者であつた

母親譲りである。

母親は二号であつた。今は父と別れていた。千香子は稚い顔だ、といわれて来た。愛くるしい、とも夢がある、ともいわれる。

だが千香子は、そういう言葉が嫌いだった。それだけ千香子は勝ち気であつた。千香子が、ライターという職業を選んだのも、勝ち気さのせいかもしれない。

だから千香子の眼は、女性にしては光が強い方だった。

男は腕時計を見た。

「タレントと約束すると、大抵時間を守らない、あなたは、雑誌社の方ですか？」

と男がいった。

「はあ、そうです」

「大変でしょう、タレントと会うのは、相当遅れそうだから、僕は用事を済ませて来ます」

「はあ」

としか千香子はいえない。

男は応接室を出て行った。玄関の方ではなく、裏の方に歩いて行つたらしい。三木家と相当親しい人間なのだろうか。

暫く待っていると、ドアがノックされ、今出て行つた男が、顔を覗かせた。

「二時間位、遅くなるらしい、僕はPホテルで会うことにしました」

「どうも」

と千香子はいった。

二時間も待つとなると大変だった。

それよりも、二時間も遅くなるなら、三木の細君が千香子に告げるべきではないか。

千香子の知らない訪問客に告げさせるなど、全くエチケツトを心得ていない。

芸能界には、一般にエチケツトを知らない人種が集まっているのではないか。

別な日の方が良いかもしれない。

千香子が立ち上がった時、三木夫人が現われた。三木康子は、芦屋の資産家の娘だった。

三木夫婦の苦難時代というのは、三木が某歌手と関係し、それが週刊誌に掲載された頃のことだった。離婚か、という記事も出た。

「済みません、今、三木から電話がありまして、午後七時に、Pホテルのロビーで、お待ち下さい、ということですが」

康子は冷たく整った顔でいった。

「分りました」

と千香子も事務的に答えた。

康子の談話は、もう取ってあった。

それにしても、康子の言葉は感じが良くない。夫人なら、お待ち下さい、ではなく、お待ちしてまず、というべきではないか。

傲慢な性格なのか。

それとも言葉遣いを知らないのか。

それは兎も角、三木夫婦は、苦難時代は乗り越えたが、氷のような関係になっているような気がする。

離婚しないのは、世間体か、それとも、利害が絡んでいるか、どちらかで、お互いの愛情は冷

え切っていた。

それが分っているのに、苦難時代を乗り越えて、不動の愛情を擱つかんだような記事を書くのは、一番辛い。

つまり、真実でない記事を書かねばならない。こういう場合は筆が進まないのだった。

千香子はこの時、酒を飲みたくなる。

千香子は贅沢な邸宅から出た。さっきの男が、スポーティな外車の中にいた。

千香子を見ると、

「どちらまでです、良かったらお送りしましょう」

と笑顔を向けた。

白い歯が清潔な感じがした。

「じゃ、有楽町まで」

と千香子はいった。

「浅見です、よろしく」

と男は自己紹介した。

「木崎です、こちらこそ」

と千香子はいった。名刺を渡す積りはなかった。浅見が何という雑誌社か、と訊いた。

「週刊JYです」

「女性の週刊誌ですね、三木秀樹の女性関係で来られたんですか？」

「三木秀樹さん、また新しい女性問題がありますの？」

と千香子は訊いた。

「彼は、女性と切れたことがありますよ、そうそう、一度離婚寸前まで行きましたね」

「当時の想い出話を記事にしますの」

苦難時代を乗り越えて、というシリーズものだ、と告げた。浅見は薄笑いを浮かべた。

「奥さんに会われたでしょう、今の二人に夫婦の愛情なんてありませんよ、良くそういう記事に平気が出るな、大体あの離婚寸前の時だって、三木の借金を細君の実家が持ったので、離婚にならなかったんですよ、だからそれ以来、三木は康子夫人に頭が上がらない、細君に知られないように、隠れてこそこそやっていますよ、康子夫人の方も負けずに御発展のようですよ」

「詳しく、御存知ですね」

「色々よね、三木秀樹は一寸具合悪いけど、高元宏なら、面白いニュースを提供しても良いですよ」

高元宏は三木秀樹の先輩だった。だが、三木のように人気がつかなかった。今は、Ｔ映画のやくざものや、テレビのアクションドラマの脇役で出演している。

「高元宏は、ニュース価値がありません」

「そうか、そうやな」

と浅見は大阪弁でいって、おかしそうに笑った。

「芸能界については、相当お詳しいのね、何をなさっているのかしら」

「たいしたことはしていないですよ」

「もし何か、週刊誌の記事になるようなニュースがあったら、知らせてくれませんか？」

千香子は、車が信号で停まった時、名刺を渡した。浅見は、右手で名刺を受け取った。

「キザキ・チカコさんか」

ゆっくり呟つぶやいて胸ポケットにしまった。

名刺には、宮部班の電話番号が印刷されている。千香子が社にいることはめったにないが、連絡はつく。

千香子は、あなたの名刺もいただきたい、と口まで出かったが、いかなかった。

名刺は持っていないんですよ、とあっさりいわれそうな気がした。

千香子は、有楽町で映画でも見る積りだった。七時まで、エアポケットのように時間が空いたのだ。

「大阪にいらっしゃったんですか？」

と千香子は訊いた。

「ああ、この大阪弁ですか、大阪に住んでいるんです、東京にも、部屋がありますがね」と益々不思議なことをいう。

「大阪はどちらですか？」

「木崎さんも、大阪にいたんですか」

「高校を出るまで、大阪でした。天下茶屋です」

「ほう、僕は今、西宮ですがね、子供の頃は住吉公園の近くでした、意外と近いですね、そうそう、天下茶屋、天神の森といえば昔はお婆めかけさんが住んでいたらしいな」

浅見は勿論、千香子の母親を知る筈はなかった。だが、浅見の言葉は矢張り、千香子の胸を刺した。

浅見が、千香子の気配を感じて、視線を千香子の方に移した。おそらく千香子の表情はこわば

つていただろう。

「僕の母は、お妾さんでしてね、どうして、近所に分ったのか、子供の頃は、良く苛められましてよ、子供というやつは残酷だからな、だから僕には、童心なんて言葉がぴんと来ない」

「ああ、そうでしたの、私の母も同じなの」

千香子は、自分の家庭の事情を余り他には喋らなかつた。千香子が喋ったのは半年ほど同棲した伊曾野、同棲はしなかつたが、矢張り半年近く関係した植木の二人だけだつた。

そんな千香子が、初めて会つた浅見に話してしまつたのだ。

千香子の母親は堀江の芸者であつた。

母の話だと父親は政治家だということだが、千香子に詳しく話さない。千香子がもの心ついてから、父親が家に来たことはなかつた。

千香子を生んで間もなく、母は父と別れたのだろう。

母は今、キタ新地でバーを、ミナミで麻雀屋を経営していた。

だからこそ、千香子は東京で大学生活が送れたのだつた。

母はもう五十だが、キタ新地のバーには、時々顔を出している。店にはセカンドママがおり、別に母が顔を出さなくても良いのだが、母は水商売が好きなのだろう。

母の話をしてから、二人は何となく沈黙勝ちになつた。

有楽町の近くまで来た時、

「今日はもう三木とは会わないんですか？」

「七時にPホテルで会うことになっています」

「そうですか、僕も三木と一緒にいるかもしれません、お仕事の邪魔はしませんから」

千香子はN劇場の近くで浅見の車から下りた。

浅見は千香子に手を挙げて走り去った。

ナンバーは大阪だ。浅見は自分で車を運転して、大阪から来たのだろう。

幾ら浅見が自分の母は二号だ、などといっても何も千香子までが、母のことを喋る必要はなかった。

初めて会ったばかりの男ではないか。

お互いの心が通い合うような会話は余りしていない。

千香子は自分が酷く、軽薄に思えた。

それにしても、浅見の言葉で気になるのは、童心なんて信じない、と吐き出すようにいった言葉だった。

あの男の内部の暗さが、窺<sup>うかが</sup>われる。

千香子は、見たいと思っていた映画館に入った。丁度、千香子位の年齢の女性が主人公で、恋とセックスの倦怠感を描いたものだった。

見ていて、千香子は身につまされる思いがした。

今、千香子には付き合っている男性が三人いた。

そのうちの一人は有名なカメラマンで、月に一度位しか会えない。他の二人は、同じライターと、広告会社の企画マンだった。

その三人以外にも、刹那的な浮気をする。

だが、千香子と三人の男性の間には、愛は勿論、恋と呼べるものさえなかった。セックスが燃えれば燃えるほど、別れの時が空<sup>そら</sup>しい。

愛がないから、余計セックスに燃えようとし、その後で、反動のように深い空しさを覚えるのだった。

映画館を出た時、盛り場は夜であった。

六時を少し過ぎていた。

千香子は宮部に電話を入れた。

「原稿は明日の五時までだ、だから、今夜中には、どんなことがあっても、三木から話を聞くように」

「はい、そうします」

千香子はタクシーで芝のPホテルに行った。七時十五分位前に着いた。

ロビーに三木の姿はない。

千香子はコーヒーハウスでコーヒーを注文した。一日に三杯位、コーヒーを飲むのだ。

## 一人の部屋で

三木は七時過ぎに現われた。プロダクションのマネジャーのような男と一緒にだった。

芸能界の男は一眼で分る。特有の雰囲気を持っているからだ。

三木の話はつまらなかった。千香子は何故か、浅見のことが気になって仕方がなかった。初めて会った男なのに、母が二号などと喋ってしまった、自分の軽薄さが悔まれる。